

癒やすことのできない傷痕

中国がみずからの近代史を「屈辱」という屈辱的な用語法をもって記述するのは理由がある。アヘン戦争を機に欧州列強がアジアに向かう「西力東漸」を開始、日清戦争に敗れて清国の衰退ぶりがあらわになるや、列強は沿海部の有力都市を次々とみずからの租借地としていった。自国の領土が、地上に落ちた瓜がばらばらに裂けていくような「瓜分の危機」に直面して、人々は手ひどい喪失感に苛まれたのであろう。

アヘン戦争敗北の後、「洋務運動」と呼ばれる欧化政策が動き出し、さらに日本の明治維新に範を取った立憲君主制の成立を目指す「変法自強」が提唱されたものの、いずれも失敗に終わった。さらに義和団という宗教的な秘密結社による熱狂的な民衆反乱が鳴動して王朝を苦しめた。

ここに王朝を倒し、共和制を樹立するより他に中国の生きる道な

本欄50年と思う

「屈辱の近代史」の中の習近平

しと決する孫文により「辛亥革命」がなり、中華民国が成立した。しかし各地に軍閥が跋扈、これが離合集散を繰り返して政情不安が収束することはなかった。1937年には日中戦争が勃発、共産党が勢力を拡大し、国共内戦へとつなげた。内戦に共産党が勝利、中華人民共和国が成立してようやく国家統一がなされた。

しかし屈辱の近代史が終わることとはまだなかった。超越的な権力者として君臨した毛沢東の現実を顧みない「冒進」により、政治も経済も惨憺たる状況に陥った。大躍進運動、人民公社化運動、プロレタリア文化大革命(文革)は癒やすことのできない傷痕を中国の現代史に残した。大躍進運動における餓死者数は7000万人に及んだといわれる。列強により引き裂かれた隷従の中国を「救亡」し、世界に伍する大国たらしめようとした毛のユートピア思想の帰

正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

結は惨たるものであった。

「中国の夢」の行方は

冒進の過酷な現実を見据えて毛路線を調整しようとする「反冒進」の権力闘争に挑んだのが、劉少奇や鄧小平の「実権派」であった。彼らを追い落とすための毛による闘争が狂気の文革だった。毛の死去をもってこれは終焉した。鄧は生粋の生産力主義者であった。この思想が1978年の第11期3中総会において幕を切って落ちた改革・開放政策の中心概念と

なり、今日に至る、日本のGDPを抜き米国にいずれ追い追いつかんとする経済の大膨張へとつながっていった。そして清末以来の屈辱の近代史からの救いの時代がついに到来しようとしたかにみえる。習近平が唱える「中華民族の偉大なる復興」とは、高成長に裏付けられた総合的国力への自信の表明なのであろう。2049年の建国100周年までに米国に代わり世界最大の覇権国家となり、社会主義の優位性を顕示しようという「中国の夢」が習のものである。

中国共産党には3つの「歴史決議」がある。1945年の毛決議、81年の鄧決議、そして一昨年の習決議(「党の百年奮闘の重要な成果と歴史的経験に関する中央の決議」)である。「近代以降、帝国主義、封建主義、官僚資本主義という3つの大きな山が中国人民に重くのしかかり、西洋列強から「東亜の病夫」という屈辱的な名をつけられた。100年にわたり、党は人民を指導して勇壮雄大で偉大な闘争を経て中国人民が侮られ、抑圧され、奴隷の報いを受けた運命を断ち切り、国家社会および自分の運命の主人公となった」(日経電子版)

膨張する尊大な国に対し

奇妙なことに、習にとっては建国後の暗黒の毛時代などまるで存在しなかったかのような口吻である。というより習は毛の正統的後継者であるかのごとくに振る舞っている。革命の聖地・陝西省延安の貧困農村への下放をみずから買って出たと語っており、中国現代史最大の悲劇である大躍進運動にも文革にも習が関心をもっている。 ようにはみえない。昨秋、2期10年の不文律を破って3期目の党総書記の地位を手にし、党指導部から反習的勢力のすべてを放逐して習一強体制を確立した。毛よりも毛たらんとして党内で絶対的権力を独占したのである。 共産党指導部はすべて習近平の意のままであり、その意思が冒進に傾いても劉も鄧もすでにない。この政治的な意思決定のありようは、強大にみえながらいかにも危うい。超越的権力者としてイデオロギー優先の冒進に出る可能性がある。台湾統一の時期や方式もすべて習の判断一つにかかっている。今後の日本が対応を迫られるのはこのような習体制である。 本欄「正論」が50周年を迎えた。草創期の論客が猪木正道氏である。氏は旧ソ連邦の独善的な言説、ならびにこれに追随する日本の左派知識人を徹底的に批判する論陣を張った。現在の日本の知識人であれば、凋落するロシアにかわって膨張するあの尊大なる国家、中国を徹底的に論じ尽くさねばならないと私は考える。(わたなべ としお)